

書道研究誌

書の光

4
2025



Vol.680
宮城野書道会



漢詩を味わう

第189回

清明 杜牧

清明時節雨紛紛 清明の時節 雨紛紛

路上行人欲断魂 路上の行人 魂を断たんと欲す

借問酒家何処有 借問す 酒家 何れの処にか有る

牧童遥指杏花村 牧童 遥かに指す 杏花の村

時は清明の時節というのに春雨がしとしと降りしきっている。道ゆく旅人は、侘びしさに心が折れそうになる。

「ちよつと君お尋ねするが、居酒屋はどこだい」

牛飼いの少年は、はるか先の杏花咲く村を指差した。

《清明》二十四節気の一つ。陽暦の四月五日ごろ。

《紛々》雨が煙るように降りしきるさま。

《行人》旅人。

《借問》「ちよつとおたずねします」の意。

冬至から数えて百七日目、陽暦では四月五、六日に当たるのが二十四節気の一つ、清明節です。清明節の前三日間は、南北朝時代から火を使わずに冷たい食事だけを食べるといふ「寒食」といふ風習がありました。春秋時代に晋の忠臣介子推が山で焼け死んだので、人々がそれを憐れんで、火を断つたことに始まると伝えられます。このことによつて、本来百五日目だった清明節は、百七日目に先送りとなったと言われます。

清明のこの日は、ようやく火を使うことが許されます。唐の玄宗時代頃から寒食と清明を併せて四日間の休暇が与えられ、人々は「拝掃」と呼ばれる墓参りをし、また「踏青」といふ野辺の遊びを楽しんで、春爛漫の時節を過ごしました。

この杜牧詩は、そんな清明節に春雨が降りしきつて、道ゆく旅人、これはまさに杜牧本人のことですが、気が滅入つて侘しい思いをします。このくだりは宋時代の蘇東坡の「黄州寒食詩卷」の一節「今年又苦雨」を想起させます。蘇軾は黄州に流されて三年目の寒食を迎えたものの降りしきる雨に秋のような侘しさを詠つていて、杜牧の心境も同様です。一方で、この詩の優れているところは、これを寂しい詩にせず、牧童に酒場の場所を尋ねると、牧童は口で答えず杏花が咲く村を指差します。杏花によつて本来の季節感を私たちに感じさせます。

作者の杜牧は、晩唐第一の詩人といわれ、杜甫の「大杜」に対して「小杜」と称されます。「千里鶯啼いて緑紅に映ず」と詠んだ『江南の春』や、「霜葉は二月の花よりも紅なり」と結んだ『山行』など、杜牧の詩は、難解な文言を使わずに、詩に詠む情景が自然と想像される点にあり、一幅の絵画を見るようです。

参考文献…中国詩人選集(岩波書店)・漢詩の事典(大修館書店)

五渡溪の頭り 躑躅 紅なり 嵩陽寺の裏 講時の鐘 春山 處處 行きて 應に 好かるべし 一月 花を見て 幾峰に か到的

五渡溪の頭り 躑躅 紅なり 嵩陽寺の裏 講時の鐘 春山 處處 行きて 應に 好かるべし 一月 花を見て 幾峰に か到的

《大意》五渡溪のほとりには躑躅がまつかにさいており、嵩陽寺では仏經を講ずる時につげる鐘がなる。春の山はどこへ行っても山歩きによいところばかりでしょう。ひと月のあいだ毎花をみて歩いていくつの峰に上りましたか。(張籍詩・李渤に寄す)

身世青雲の上 塵埃大夢の間

身世青雲上 身世青雲上 塵埃大夢間 塵埃大夢間

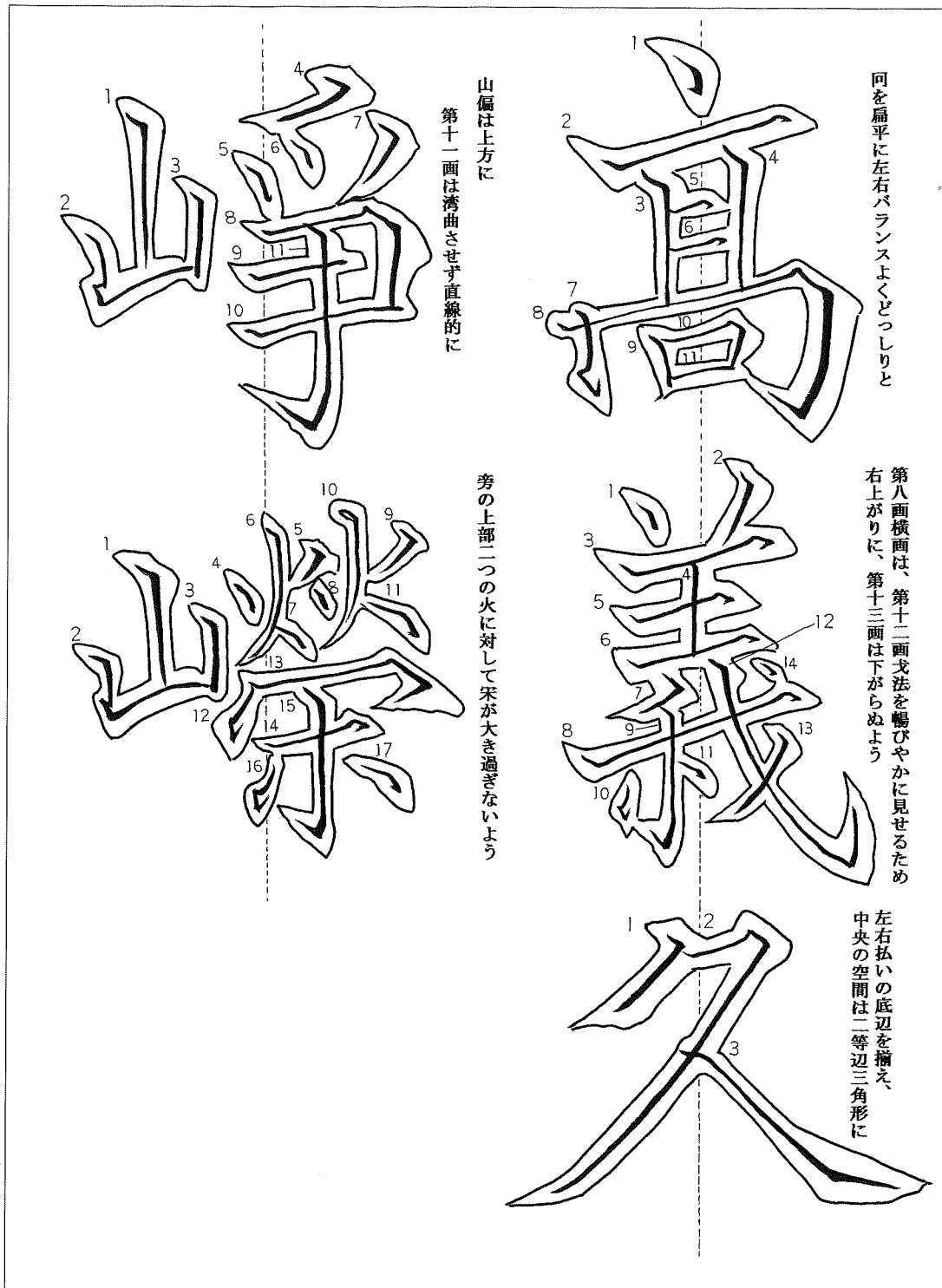
《大意》一生涯を順調に立身出世をたどったが、この世の塵や穢れは長き間の夢。(許古)

読み
高義 久しく崢嶸たり (あなたの徳義は久しき前から山のように際立っている)

崢嶸
山嶸

高義
久

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

蘇軾詩

「呂行甫司門の河陽に

倅となるを送る」

(前半)

結交不在久

交を結ぶこと 久しきに在ざるも

傾蓋如平生

蓋を傾くること 平生の如し

識子今幾日

子を識りて 今幾日ぞ

送別亦有情

別れ送りて 亦た情有り

子生公相家

子は公相の家に生まれ

高義久崢嶸

高義 久く崢嶸たり

天才既超詣

天才 既に超詣

世故亦屢更

世故も亦た屢しば更たり

譬如追風驥

譬えば風を追う驥の如し

豈免羈與纓

豈に羈と纓を免れんや

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

嶙嶭

高義久

嶙嶭

高義久

次号課題

隸書

超詣

天才既

嶙嶭

高義久

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
吉野川岸の山吹咲きたけり					
峰の桜は散りはてぬらむ					

藤原家隆

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

ウントウチウ
ロケツイソウ

略解

雲が騰って雨を降らせ
露が寒気に凝り結んで霧となる

膺符受命

符を膺^うけ命を受けざるはなし……

■ 虞世南・孔子廟堂碑

(初唐・西暦六二九年頃) の臨書

(8)

象雲臨

『膺符受命』

孔子廟堂碑の内容は、虞世南が宮中にあって秘書親で書物を閲覧して、過去の聖人について学んできたことを述べています。過去に三皇五帝といわれる聖人たちが現れて、三墳五典と呼ばれる聖典を著したことに触れ、今までの王朝では聖人の書物である河図洛書を拝観して、「符を膺け命を受けざるはなし(天のお告げを奉受しない)」と今月の件になります。古代の理想とした聖人について述べ、波乱に満ちた生涯を送った孔子がもっとも偉大だったと絶賛します。そして碑の後半では、孔子の遺徳が途絶えそうになったが、唐太宗の功績によって受け継がれたとして、美辞麗句を揃えて唐王朝と太宗を称揚しています。

〔膺〕 上部を幅広にして月がこれを支えます。

〔符〕 竹冠は扁平な竹を書くようにして、左右縦画は付の縦画に呼応するように。

〔受・命〕 右半分を広くとり、右払いを暢びやかに。

真行絶致者也

真・行の絶致なる者なり……

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

象雲臨

真行絶致者也

『真行絶致者也』

この部分は王羲之の書芸術について、「楽毅論・黄庭経・東方朔画赞・太子箴・蘭亭集序・告誓文が伝えられているが、真（楷書）・行書の極致といえるものである。」という部分です。

前回と同様に右側に料紙の折れ目に筆先が当たり、線が変化する「節筆」があります。とくに「者」と「也」が線の変化が大きく見応えがあります。

「真・行」真の第一画をユツタリと、下部の二点の間隔を広くとって、行への連綿線は直筆で自然に。

「絶・致」偏から旁に続く斜めの先を強く。二字とも終筆部分は小さめに結びます。

「者・也」節筆がアクセントになって味わい深い字です。者の左に流れる斜線を強く。